42　産婦人科医 緒方正清
（一八六四～一九一九）

長門谷　洋　治

明治四三年（一九一〇）四月一日から四日まで、大阪市において第三回日本医学会総会が行なわれた。会頭・青山胤通、副会頭・佐多愛彦で、準備委員長は緒方婦人科病院（大阪市東区今橋三丁目）の緒方正清（一八六四～一九一九）であった。本総会では一六の分科があったが、その第七分科が産科婦人科学で、これは第八回日本婦人科学会集会を兼ねていた。会長は濱田玄達で、委員に橋爪哲造、緒方正清、緒方十右衛門、河野徹志の四人がついた。ここでは四月二日、三日の二日間で六一題が出題された由であるが、『第三回日本医学会誌』（明治四四年）にはこのうち五七題の抄録と討論が一九八頁にわたって登載されている。緒方は本会で「子宮後転及ビ後屈症ニ於ル膣式固定術ニ就テ」述べているが、これに対して木下正中と高山尚平が討論を行っている。この緒方のものを含め、本集会の演題中、二五題が大阪からのもので、うち八題が緒方産婦人科病院からである。一施設からの演題数としては最多である。緒方は積極的に討論にも参加し、記録されているものだけでも十二回に達し、しかも挑戦的なものが多い。保存的療法よりも手術を推す（たとえば、「子宮外妊娠ノ診断ヲシタ時ハ絶対的ニ外科的手術ヲ施スベシ」）が、術式、予後にも言及し、京大（高山尚平教授）の演題「我教室ニ於ケル子宮癌手術ノ成績報告」ではその死亡率（二三・一％）に対し「高山氏ノ手術ハ死亡率多シ」とし、高山が腹式を推すに対し、緒方は膣式を主張している。

第三回日本医学会総会は、医学会総会が地方で行われた最初であるが、会員総数三千四百人近くで大きな成功をおさめた。これには緒方の果した役割が少なくない。当時彼は四六歳であった。

緒方正清は本姓中村、香川県の貧農に生まれる。明治一二年高松医学校に入り、三年後上京して帝国大学医科

大学別課に入学、明治二〇年卒業（同窓に荒木寅三郎、金杉英五郎）緒方洪庵六男の収二郎と知りあい、同四女の夫・拙斎の養子となる。明治二二年より二五年までドイツに留学、洪庵次男の惟準が院長の大阪の緒方病院の産婦人科々長となり、同三五年には独立して東区の旧除痘館あとに緒方産婦人科病院を創始、助産婦教育にもあたった。ちなみに産婆の語を排し、助産婦の語を提唱したのはその弟子高橋辰五郎によるとされる。明治四三年大阪市医師会会長、大正二年大阪府医師会初代会長。他に大阪慈恵病院医学校校長、医術開業試験委員、内務省産婆術開業試験委員などを歴任。

緒方は民間にありながら前述のように学会活動を活発に行ったほか、多くの雑誌を創刊、寄稿し、著作も翻訳を含め豊富であり、中でも『日本産科学史』（大正八年）は今日なおその価値が高い。骨軟化症（『富山県奇病論』明治四〇年の著あり）医理学療法、放射線科学にも関心が深かった。

『日本婦人科学会雑誌』第一号（明治三九年）の巻頭論文は緒方の「子宮筋腫ノ外科的療法」である。彼はそれより先、緒方産婦人科学会より『中央婦人科学雑誌』を出し、その第一号（明治三五年）の巻頭には「婦人科的内臓外科」を発表。さらに明治二九年には緒方助産婦学会より『助産之栞』を発刊（昭和一九年五七五号まで続く）

他に筆者の手元にある著訳書だけをあげると『社会的色欲論』（ヘーガル著、緒方訳。明治三二年初版、同四一年四版）『臨床婦人科軌範』（明治三三年）『産科婦人科診断学』（ゼルハイム著・緒方訳、ただし彼の序によれば実際の翻訳従事は助手・山本貞治によると）『産婦人科雑纂』（明治四四年）がある。彼の門弟は大阪の女医の草分け・福井繁をはじめ、多数を算える。その業は養子・祐将、その子・正美が継いで、正清創始の地で今日に及んでいる。

（豊中市・長門谷皮膚科）